

# 「資本市場で海運の注目高まる」

## ■ キャピタルリンクのボルノジス社長

有力上場船主の資本市場向け情報発信（IR）などを手掛ける米国キャピタル・リンク社が今年26日、日本で久しぶりのフォーラム「ジャパン・マリタイム・フォーラム」を開催する。同社のニコラス・ボルノジス社長は本紙書面インタビューに応じ、近年の海運業の好業績や世界のエネルギー問題などを背景に、「多くの投資家が海運セクターの存在に気付いた」と説明する。資本市場の動向や、日本フォーラムのねらいなどについて聞いた。

—— 海運業が近年空前の利益を上げたことで、資本市場における海運産業への見方に変化はあったか。

「海運業はグローバルサプライチェーンにおける重要な要素だが、資本市場においては比較的新参者だった。だが最近、パンデミックや地政学的緊張といった危機が次々と到来し、投資家は海運業の重要な役割とともに、多くの海運セクターでの収益性の力強さに気づいた。エネルギー安全保障やエネルギー自給、食料安全保障などの概念が、海運業の存在をより多くの人々に認識させることになった。これまでインフラやエネルギー、コモディティなどのセクターを対象としていた投資家も、いまは海運セクターをカバーするようになっている」

「今後を展望すると、海運業は新しい時代に入っていくと予想されている。地政学的課題は続くと言われる一方、世界経済が徐々に成長軌道に戻る中で需要は引き続き強いと見込まれる。さらに、ドライバルクやタンカーなど特定のセクターでは新造船発注残が少ない点も、運賃市場にはプラスになると予想される」

—— 船主の新規株式公開（I



PO) などが低調だが、最近の資金調達環境をどう見るか。

「海運会社の大半は堅調な収益性を享受しており、キャッシュフローを債務削減や船隊更新、株主還元に充てている。一方、資産価格が高止まりしており、株式市場のバリュエーションは海運会社にとって十分に魅力的ではないと判断されているため、IPOや公募による資金調達の動きは鈍い。多くの企業が現在、特に魅力的な条件でもない限りは資本調達の必要性を感じていない。また高金利環境は債券市場の利用にも逆風になる。このため、銀行融資とオルタナティブファイナンスが引き続き海運会社の主な資金調達ソースであり続けている。グリーンボンドやサステナビリティ・リンク・ローンといったグリーン・ファイナンスの採用も一般的になってきた。このシフトは、世界的な脱炭素化に沿ったものであるだけでなく、ESGを重視する投資家へのアピールとなり、海運セクターの魅力と財務健全性を高めることにつながる可能性がある」

—— 海運会社のESGへの取り組みが資金調達などに与える影響は。

「投資家は企業の環境政策や脱炭素政策を投資判断の条件として重視するようになっている。チャ

ーターや保険会社、金融機関も、海運会社の脱炭素などの取り組みを考慮するようになっている。グリーン SHIPPING に向けた動きが、あらゆる角度から押し寄せているのは間違いない。今後、海運会社のESG方針と透明性の高い排出量報告が、資本市場へのアクセスに与える影響は2つある。1つは、企業としての評価を高めることで投資家にとって魅力的な投資対象となること。もう1つは、グリーンボンドや持続可能性連動融資のような、新たな資金調達手段を利用できるということだ」

—— 日本の海事産業に対する世界の期待と認識をどう見るか。

「日本海事産業は世界的に尊敬され、不可欠なプレーヤーと見なされている。日本の金融機関も、船舶金融市場で主要な役割を担い、その役割も拡大しつつある。日本は、高品質で革新的、効率的な船舶を提供するという評価を長年維持しており、厳しい環境規制と脱炭素化が進む中で特に大きな役割を果たすことが期待されている」

—— キャピタルリンクは久しぶりに日本でフォーラムを開催する。

「日本で対面のフォーラムを開催するのは5年ぶりだが、その間もウェビナーや日本のリーダーシップに焦点を当てたパネルディスカッションを開催してきた。今回、2回目の『キャピタル・リンク・ジャパン・マリタイム・フォーラム』を東京で開催できることを大変うれしく思っている。今回は日本の主要海運会社に多数参加していただき、素晴らしいネットワーキングとビジネス開発の機会になる。日本内外の金融機関やリース会社、造船所、海運会社が交流し、より広範な業界との対話を育む機会を提供できると確信している」